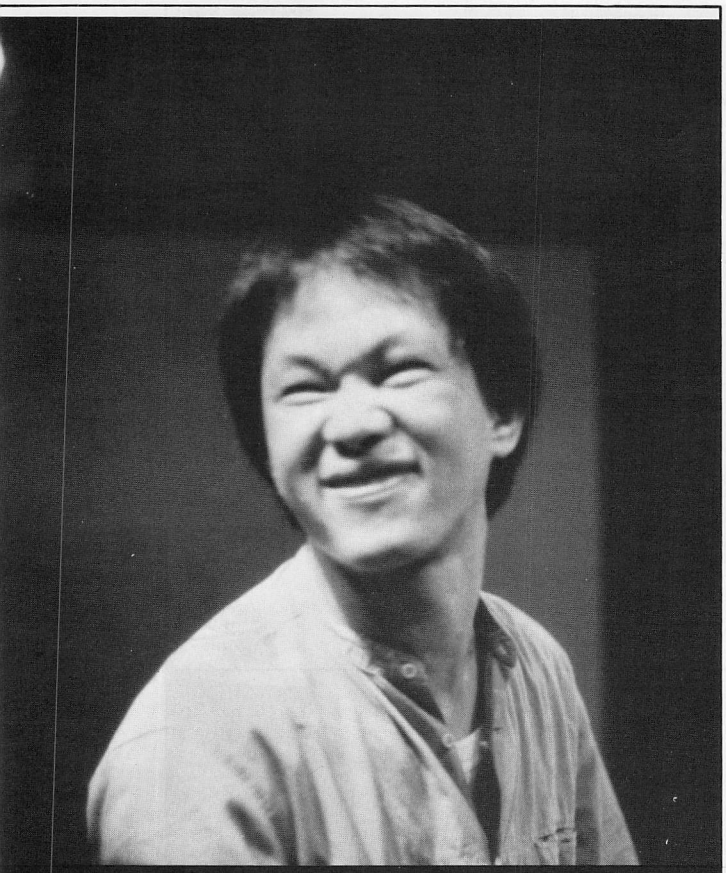
楽しい祝宴。

奥村ヒデマロおめでとう



最近、あの憂歌団の歌がTVのコマーシャルバックからよく聞こえてくる。カレーと何かのCFとだったと思うが、憂歌団の歌の方ばかりが印象に残り、正確に商品名や会社名を思い出せない。そればかりか余計なことばかり思い浮べてしまう。

1973年頃の京大西部講堂。当時はロックのメッカだった西部講堂にブルースファンがぎっしり埋尽くされていた。上田正樹とバッド・クラブ・バンド、ウエストロードブルースバンド、ブルースハウス・ブルースバンド、憂歌団。ビワコバレエの8・8ロック・デイのゲストもブルース系のバンド一色だった頃のことなどを思い出したりしてるうちにCFはいつも鮮かに終っている。

「憂歌団」ブルースフィーリングを生かした日本語のブルース、まさに憂歌としかいいようのない、独特の世界を築きあげてきたバンド。爆発的とかブームだとかの表現があてはまらない熱狂的なファン層と「ええ感じ、好きや」のノリで少しホロ酔い加減の奴が最も愛しているバンド。その憂歌団の五人目のメンバーとも言うべき奥村ヒデマロがメデタク結婚した。

ブルースが京都から全国へ大いに盛りあがった頃のその仕掛人でもあり、今や伝説的になった円山野外でのジミークリフライブのプロデューサー、スペシャルズ、クラブモダーンで開かれたレゲエシンジケートも彼の手によるものだ。

いつも、晴れた日のトタン屋根の下で飲んだくれているような印象からは想像もつかないパワフルな人物である。結婚したというニュースにあらゆる意味で湧いた。

ウエディングパーティーは感慨深い礫礫であった。

ツービートでゆれていた京都のその筋の連中、レコード会社やプロモーター筋、ヒデマロの酒場フレンズ、芸人ととりあえずシッチャカメッチャカにいろんな連中が集まった。

司会はなんと、あのシャイな憂歌団の木村君。そのシャイさにただマイクの前に立つだけで大いに盛りあがっていた。一般的にはヘンな輩と呼ばれているような連中ばかりのせいか、いわゆるイロモノ的な芸やスピーチはあまり目立たないようであった。それとスピーチの内容が業界全体を刺激するような濃いのが多く、苦笑をさそった。さすがにパントマイムの中村ゆうじの芸的スピーチはうけていた。

最後に新郎新婦が楽しそうに手をつないで歌って宴はおヒラキになった。

『楽しい』という言葉が新鮮な気持ちで思い出せる、そんな宴があった。